

かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



主よ 朝明けに 私の声を聞いてください。
朝明けに 私はあなたの御前に備えをし
仰ぎ望みます。

(詩篇五篇三節)

自宅の約百坪の畑に、トマトやキュウリをはじめ二十種類くらいの作物を育てています。素人が始めた畑ですから、1年目はあまり期待していませんでしたが、2月末に植えたジャガイモをすでに収穫しています。土地を耕し、肥料と水を与えてあげれば実は確実に収穫できます。ですから、とても面白くて夢中になります。

さて、本来は伝道も収穫の喜びにあふれて夢中になれるはずですが。しかし、各伝道所からの報告を頂くと、「チラシを配布しても来会者が一人もなかった」「来られても続かない」という言葉が見られます。伝道者にとって収穫と呼べる一番の喜びは、人が改心して神様を信じて救われることです。その喜びの機会がないと、夢中になれるものも夢中になれなくなってしまいます。そして、ほかに夢中になれるものを探してしまいます。

畑の話に戻りますが、トマトがもうすぐ収穫だと言うときに、カラスが朝早くにやってきて、赤くなったトマトを落としていきます。カラスとの根比べ知恵比べです。私たちは自分自身のたましいを朝早くに起きて見張らなければなりません。神様のこと以上に夢中になっていることはないだろうか、蒔かれた御言葉の種がカラスに奪われようとしてはいないだろうか、私たちはたましいを見張らなければなりません。

(JBBF国内宣教委員長・榎本昌博)

北関東地区教会訪問記



初めに

2018年6月11〜12日、国内宣教委員で北関東地区にある7つの教会を訪問いたしました。教会訪問はこれで五回目になります。今回は、いつも委員会の働きをリードしてくださっている榎本委員長が体調不良のために参加できない中で訪問となりました。初めて訪問する教会も多く、どのような旅になるか想像できませんでしたが、北関東滞在期間、主は様々なことを教えてくださいました。その一部を、報告いたします。

大平聖書浸礼教会

JR高崎駅で合流した私たちは、まず栃木県にある大平聖書バプテスト教会に向かいました。のどかな田園風景が広がる地域に、素敵な白い会堂が建っています。

した。大平教会に到着すると、牧師の吉本一雄先生が、笑顔で私たちを迎え入れてくださいました。委員たちはみな吉本先生との久しぶりの再会を喜びました。大平聖書浸礼教会は、小山聖書浸礼教会の伝道所として1991年1月から伝道を開始しました。92年9月に吉本先生が専任伝道者として招聘され、94年10月に独立。96年4月に完成した会堂の建築にあたっては、建設業者の倒産というトラブルもあり、多くの苦労があったようですが、吉本先生も大工仕事に加わり、建設途中であった会堂を整え、教会・牧師館として使用できるようにされたとのことです。



教会の沿革をお尋ねする中で、話はずいぶん大平教会が長きにわたって取り組んでこられた「チャーチスクー

ル」の話題になりました。牧師夫妻のお子様「ホームスクール」から始まった取り組みは2〜3年の内に牧師家族以外の子どもたちも迎えたチャーチスクールになりました。教会の方々も取り組みを理解して下さり、教師等として授業に参与して下さる兄弟姉妹も与えられ、結果、兄弟姉妹と日曜日に限らずに多くの時間を共有することが許され、教会の絆が育まれてきました。チャーチスクールはホームスクールからの始まりであり、最初から拡大していく計画があったわけではないようですが「必要にお仕えていく」という基本的な姿勢の先に教会の歩みが形作られていきました。細かなことにとらわれず、おおらかに自由にお仕えておられる吉本先生の姿に、私たちは大きな励ましを得ました。



小山聖書浸礼教会 野木聖書浸礼教会

大平教会を出発した私たちは、小山聖書浸礼教会に向かいました。大きな通り沿いにある教会堂は、正面に大きな十字架を備えた堂々とした建物でした。200人以上を取容できる広々とした礼拝堂に、小山教会が掲げているビジョンの広がりを見つ、その礼拝堂にて、牧師の浜田光人先生から教会のビジョンと現在の取り組みをお聞きすることが許されました。

浜田先生は、以前からビジョンの一つとして掲げてこられた教員のための宿泊施設（シャロームの家）建設の進捗状況を教えてくださいました。すでに伝道所である野木教会の隣に220坪の土地



を取得済みでまもなく建設工事が開始されるようになっています。「信者一人一人が最後まで信仰生活を全うできるように」という折りが、いよいよ形になろうとしています。

した。ずっと教会生活を送ってきた方が「信仰者たちのいない環境・礼拝にも集えない環境で最期の時を過ごさなければならぬ」ということがないように「ホームを出て数秒で礼拝堂に行くことのできる環境を整えたかった」と浜田先生は思いを語ってくださいました。一人一人に対する心づかいが、小山教会が掲げている「全員参加での教会形成」という理念の中にも息づいているようにも思いました。小山教会は主要なメンバーだけが成長して活躍する教会ではなく、なるべく教会員全員が教会キャンプや祝日に行われる活動に参加できるように工夫し、励まし、そこで時間を共有して、学びと交わりを深めみんな成長していくという流れを作ってこられたそうです。浜田先生の視点は、教会内だけにとどまらず地域社会とそこに生きる人々にも向けられていました。25年間、配布し続けている地域機関紙「シャロームタイムス」は毎月3万5千部を、約40名で配布しておられるそうです。伝道師の道明先生が町の情報を取材し、まとめておられる記事もありました。また、浜田先生は現在計画



史がわかり福音の素晴らしさに目が開かれるような施設（クリスチャンセンター）を建設するという新しい構想があるようです。私たちは浜田先生の視野の広さと洞察の深さ、枠にとらわれない斬新なアイデアに驚くばかりでした。



続いて私たちは小山教会が新たに取得した700坪の土地を見せていただきました。浜田先生の案内のもと、小山教会の伝道所にあたる野木聖書浸礼教会へと向かいました。野木教会は「ホッとできる空間」をコンセプトにデザインされたモダンな建物でその入り口には歓迎のしるしである噴水も備えられていました。野木教会の精錬された礼拝堂にて浜田先生に折りをもって送り出していただき、私たちは今日最後の訪問地である足利へと向かいました。

足利聖書バプテスト教会

足利市は、足利氏発祥の地で、室町時代から続く「足利学校」でも知られる歴史のある町です。かつては織物の町として栄えましたが、現在は織物業も下火となり、町は寂れてしまいました。工場は潰れ、そこが今はニュータウン化しています。教会のある場所は、足利駅の近くで、メイン通りに面する場所ですが、通りは静かで、落ち着いた印象でした。二

ュータウン化しているエリアとは異なり古くから住んでいる方々が多くいらっしゃるようです。「古都足利」と称される通りの歴史情緒溢れる町の通りの家と家との間の細い路地を入ったところに足利聖書バプテスト教会がありました。

教会に着くと、中川克己先生ご夫妻と2人のお子様たちが私たちを出迎えてくださいました。中川先生は2年前に足利教会に赴任され、今は牧師として仕えておられます。足利教会は、前任の斎藤一彦先生が牧師をされていた時代から手話通訳付きで説教奉仕がなされてきましたので、もともと手話通訳のできる中川先生はすぐにその働きを継承することができました。また精神や身体に障がいを抱えておられる方々との関わりも多くありかねてから障がい者伝道に重荷をもって取り組んでこられた中川先生は、足利教会にとって、まさに主がお遣わしくくださった働き人のように思えました。

少しずつ集う方々が増し加えられてきている教会の様子を伺う中で、中川先生が確かな神学をベースに説教に取り組む集う方々の霊的必要性を満たしておられる様子も伝わってきました。また先生が、近所の方々と地域の課題を



一緒に考え、ともに歩んでおられるという様子もお聞きすることができました。中川先生は平日にはヘルパーの仕事もされ、奥様もデイサービスの

働きをされているようですが、忙しさの中にあっても老朽化した会堂を少しずつ整えながら、課題を抱えておられる方々の隣人となり教会形成に励んでおられる姿から教えられ、励まされる交わりのひと時でした。私たちは、レトロで風情のある会堂を後にして、足利教会のすぐ近くにあるホテルへと向かいました。夜はホテルのロビーで委員会を開き、年明けのカンファレンスの打ち合わせをするのと同時に時間も疲れも忘れてそれぞれの通ってきた歩みを回顧し分かち合う幸いな時間が与えられました。

めぐみバプテストテンブル

教会訪問2日目の朝を迎えた私たちはホテルを出発し、めぐみバプテストテンブルのある群馬県邑楽郡大泉町へと向かいました。大泉町は群馬県内で最も人口の多い町で、おおよそ4万人の人々が住んでいます。人口密度も北関東3県の市町村のうち最も高い町です。外国人人口の比率も県内一で約18.1パーセント。特にブラジル人が多く住んでいます。町



の状況は教会にもそのまま当てはまり、国際色豊かな教会が形成されています。

ですが、不思議と神様は新しい人を送ってくださっているようです。教会は牧師が与えられることを祈っています。牧師館の老朽化等の課題もあり、折りの課題は少なくありません。

太田聖書バプテスト教会

続いて、私たちは完成したばかりの太田聖書バプテスト教会の新会堂に向かいました。教会に到着すると、佐藤一彦先生ご夫妻が素敵な笑顔で私たちを迎えてくださいました。佐藤先生ご夫妻はウガンダでの17年に及ぶ宣教の働きを終えて2年前から太田教会で伝道・牧会の働きに従事しておられます。

教会のある太田市はSUBARU(スバル)の企業城下町です。好景気の影響もあり、太田駅のすぐ近くにあった旧会堂の土地の値段が高騰。土地の売却によって得た資金により、通りに面した広大な土地に新しい会堂を建設することが可能になりました。会堂建設にあたっては神様の導きとしか言いようのない必要の満たしがあつたようです。

教会の近況を教えてくださいました。めぐみ教会は一昨年、牧師である澤愛作先生を天に送るという大きな試練を経験しました。現在は4名の兄弟たちが持ち回りで説教のご用をされ、礼拝が守られています。説教のご用をされている兄弟たちは、職場ではリーダー的な役割を担っておられるため多忙で、準備が夜中になつてしまうこともあるようですが、それでも熱心に聖書に取り組んでおられるとのこと。姉妹たちは教会学校で忠実な奉仕を担っておられます。澤先生の宣教の熱意と愛の交わりが確かに教会の中に残り、育まれている様子を伺うことができました。



私たちはまず、新会堂の1階を案内していただきまして、1階は窓際にお洒落なカフェさながらのテラスもある広く開放



的な空間でした。最初、1階が礼拝堂なのだと勘違いしてしまつたから

た。パーティションで区切ることで「バイブルキッズクラブ」の分級室も確保することができました。旧会堂のあった場所は駅前の繁華街ということもあり子どもたちが集まりにくい環境であったようですが、佐藤先生は新たな地域で子ども伝道にも力を入れていこうとされています。

2階は、主に礼拝堂のためのフロアです。礼拝堂は白を基調とした空間に、木造りの講壇や椅子が配置され、落ち着いた雰囲気です。礼拝堂に隣接するナースリールームの天井は空模様になっていて可愛らしい作り

です。階段があがつてすぐのスペースも広々と置いて、椅子も設けられています。佐藤先生が教会に集う子どもたちや青年たちと楽しくギターで賛美する



光景が思い浮かんでくるような空間でした。新会堂を設計する際「次の世代への思い」をもって、特に子どもたちや青年たちのことを意識されたようです。佐藤先生はまだまだ現役でお仕えできる年齢でありながら、すでに「後継者が与えられるように祈っておられる」とのことです。強い「継承」の意識を感じました。新たな会堂を拠点にどのような伝道がこの町で展開されようとしているのか、期待感を抱く訪問の機会となりました。佐藤先生の元気な声に送り出され、最後の訪問教会へと出発しました。

セントラルバプテスト教会

この旅の最後の訪問教会は、群馬県の前橋市にあるセントラルバプテスト教会です。牧師である鈴木先生は、



現在週3回の透析治療を受けておられます。お身体が大変な中にありながらも、複数の無牧教会の責任を負い、さらに神学校では総務の働きを担っておられます。

静かに雨が滴る午後のひととき、鈴木先生は、ご自身がはじめて教会を訪ねた時の話を教えてくださいました。やんちゃな性格であった先生が教会に導かれたきっかけは、妹分の女子学生の死がきっかけであったそうです。葬儀で語られた

説教に疑問を感じ、教会に足を運ぶようになったとのことです。やがて先生も、ご家族も救いに導かれました。

伝道者となり、前橋に遣わされてきた当初は、地域の方々に「神社仏閣に囲まれた地域の中で教会を建てた」ということを嘲笑されたこともあったそうです。

それでも、この地域にあって、ともに生きる中で、少しずつ、町の人々は心を開き、先生に信頼を寄せるようになり、いまではとても良い関係が築かれているそうです。現在は、前橋教会も後継牧師を祈られているとのこと。

帰り際、鈴木先生は、この旅の終着地である高崎駅への地図を丁寧に紙に書いて説明して下さり、私たちを送り出してくださいました。



さいごに

2日間で7つの教会を巡る旅は慌ただしいスケジュールではありませんでしたが、いずれの教会の先生方も、私たちを快く受け入れて下さり、限られた時間の中で教会の歴史や現状を共有していただきました。様々なタイプの牧師がおられ、「性格」も「賜物」も「リーダーシップの在り方」も多様であるということ、また教会にも「様々な時」「色々な状況」がある、ということがよくわかりました。祝福を数える時もあれば、困難の中に置かれる時もあります。しかし同時に、主はそれぞれの教会で生きて働いておられるに十分な恵みをもって、教会を助け、満たし、導いておられる、という恵みの事実にも思いを向けさせられる2日間でもありました。これからも、主が諸教会の必要を豊かに顧みてくださり、各地における宣教の働きを前進させてくださるよう、心よりお祈りいたします。

※今回訪問することのできなかつた高林聖書バプテスト教会のためにもお祈りしています。

按手礼と牧師就任の証し

検見川聖書バプテスト教会 牧師: 栢下基従



私は去る2012年2月18日に按手礼を賜り、牧師に就任しました。これまでの経緯を少し説明させていただきます。私は2014年に神学校を卒業して伝道師として招聘されましたが、同年、前任牧師が辞任しました。それ以来、教会は約3年半に渡り無牧でした。その頃は、とにかく毎週の礼拝が守られることばかり考えていました。教会は牧師辞任という試練の中で傷つき、疲弊していましたし、そのような中で、私自身も落ち込むことがありました。

しかし、主は試練の中で献身に導かれた御言葉を思い起こさせてくださいました。主イエスがペテロに言われた「あなたはわたしを愛しますか……わたしの羊を牧しなさい」(ヨハネ二一章十五～十七節)という御言葉です。私は何のためにここにいるのか。私は主が愛されている兄弟を愛し、教会に仕えるためにここにいます。その尊い御用を思い起こし立ち上ることができました。

また、主は实际的な助け手を備えてくださいました。三澤隆男先生が教会の相談役として助けてくださいました。実際的なことで相談に乗って下さり、何度も教会に足を運んでメッセージを語り助ましてくださいました。それだけでなく按手礼諸問準備委員会を指導して下さり、牧師就任に至るまで犠牲を惜しまずに関わってくださいました。主にあるフェロシップの素晴らしさ、有り難みを身に染みて感じました。教会が孤立していたらこのような助けは得られませんでした。

これまで教会は様々な試練を通してきましたが、今は「神のなされることはすべて時にかなって美しい」(伝道者三章十一節)と告白できます。ひとつひとつの事柄は、その時は意味がわかりませんが、振り返ってみるとパズルのピースのように意味がわかります。すべてのことを働かせて益とくださる神様をほめたたえます。未熟な者ですが、主の栄光のために仕えていきたいと願っています。お祈りに覚えてくだされば感謝です。



上越聖書バプテスト教会 独立の証し

すべては主の恵みのわざ

牧師：加治佐 清也

去る4月29日(日)、私たちの教会は母教会の金沢聖書バプテスト教会から独立しました。独立式の間、繰り返し込み上げてきたのは、この14年間の歩みを支え導いてくださった主の恵みへの感謝、また私たちの知るところ、知らないところで積み上げられた、母教会はじめ諸教会の祈りと忍耐、交わりと支援に対する感謝でした。

上越に伝道所が開所したのは2004年4月です。神学校に入る前から、私は「教会のないところへ教会を」という開拓伝道の思いがありました。齊藤牧師との話しで、新潟県への気持ちは定まっておりました。神学校時代は千葉教会で、卒業後は、みふみバプテスト教会でお世話になりました。その間も、新潟開拓伝道への思いは途絶えなかったのですが、県内のどこに行くかは未定でした。最終的に上越に決めたのは、国内宣教カンファレンスや、北陸での交わりで、上越地域が一番教会が少なく、折られていくことを知ったからです。その後、バーゲット先生から協力伝道のお話をいただき、名古屋教会で行われた宣教大会等で祈りとご支援を賜り、14年前の開所に至りました。

開所してまもなく、バーゲット先生ご夫妻が合流し、開所式を行い、しばらく

して、スタンフォード先生ご家族も来越され、伝道所の働きが進められていきました。トラクト配布や児童伝道などが精力的に行われました。やがて、思いもよらないことでしたが、会堂移転の話から新会堂建築の道が開かれ、2006年4月に現会堂での礼拝が始まりました。そして、以前から集っておられた方々が、信告白やバプテストマに導かれていきました。

2007年秋には、宣教師二家族が、長岡市で開拓伝道を始められることになりました。その後も主は、上越教育大学の留学生や、引越して来られる方、他教会から来られてバプテストマを受ける方などを加えてくださいました。一方で、会員の引越しを含め、その他様々な試みを教会は受け、困難な時期を迎えたこ



加治佐先生ご夫妻と上越教会の兄弟方

ともありました。しかし、母教会の祈りと支え、諸教会との交わりの中で本当に支えられました。小さな教会の集まりを励ますかのように、関東から仕事で来られた若い家族が数年間、毎週集われたりネット配信の説教で救われる方を起こしてくださったりなど、主は様々な恵みを備えてくださいました。

やがて2013年頃から、集っている方の中から自発的に信告白する人や、バプテストマを申し出る人が与えられるようになりまし。

こうして徐々に整えられていく中、2017年の伝道所総会で、次春の独立を目指すことが決まりました。その後、さらに3名の受浸者を主は与えてくださり母教会の承認もいただき、この春、独立式を迎えることができました。

振り返れば、伝道所の設立から独立にいたるまで、すべては人のわざではなくただただ主の恵みのわざであったことを覚えます。これからもそうでしょうし、そのように証できる歩みでありたいと願います。今後とも主にあるよきお交わりをよろしくお願いいたします。

すべての事を働かせて

益とさせていただきます

牧師夫人：加治佐 美佳子

2004年から始まった上越での開拓伝道は15年目を迎え、この4月に教会独立へと導かれました。たくさんの方々の祈りと尊い献げものにより、支えられて



加治佐先生ご家族

きましたこととを心から感謝いたします。

私は浦和教会で幼い頃から育ち環境の全く違う上越に

来ました。教会には、その置かれた場所によって地域性があるということを実感しています。例えば都会では、電車で時間をかけて教会に来られる方もいますが、ここ上越では、車で数分という方がほとんどです。月に一度の子供集会でもごく近所の子どもたちで集会が成り立ちます。そういった地域性や教会に与えられている特徴を大切に、丁寧に関わりを持ち続けていけたらと思っています。

これまでの歩みを振り返ってみますと折々に必要な助けを神様が与えて下さっていたのだと痛感します。当たり前と思っていたことも、実は背後に神様のご支配があるからなのだと知り、まさに「すべての事を働かせて益とさせていただきます」とのみことばの通りです。

今後も、上越伝道のために、お祈りに覚えていただければ幸いです。

献金振込先(郵便振込)

00140・2・654375

JBBF国内宣教委員会